

イースター島の教訓

巨大なモアイ像で有名なイースター島は、他の島から遠く離れた太平洋上の火山島で、面積は北海道の利尻島とほぼ同じ 163 平方kmです。人が住み始めた時期には諸説がありますが、現在では 1200 年頃というのが定説になっています。入植したのはカヌーで来たポリネシア人で、鶏とネズミを食用に持ち込んでいます。当時のイースター島には、巨大な椰子が生い茂っていたことが化石や花粉の研究から判明しています。モアイ像は入植から 17 世紀までに 1000 体以上が作られ、最も大きな像は高さが約 8m で重さが約 80 トンもあります。ところが 18 世紀以降は全く作られなくなり、山肌には作りかけのモアイ像がいくつも残されています。モアイ像が作られた場所は、凝灰岩が多い噴火口の跡地です。そこから数十トンのモアイ像を海岸近くまで運ぶのには、太い木でできた橇と多くの綱が必要でした。予定した場所に据え付けるのにも、頑丈な木材でできた橇が使われたはずですが、木材は住宅や神殿の建設にも、漁をするカヌーを作るのにも必要でしたから、椰子の木は次々に伐採されました。その結果、栄養豊かな土壌は保水力を失って海に流出し、農作物の収量が低下して食糧不足に陥りました。森林が消失するにつれて農業も漁業も困難になり、耕作地や漁場を巡る部族間の争いが激しくなりました。

「文明の崩壊」の著者であるジャレド・ダイヤモンドは、モアイ像が作られなくなったのは伐採で森林がほぼ消滅したからだとして分析しています。最後は樹木のない荒れた土地だけが残り、島に残る人間の生存自体が危機的な状況になったのです。イースター島の森林消失は、人為的な自然破壊が人間社会の崩壊を招いた実例です。イースター島の教訓は、人間が自然を再生産能力以上に収奪すると、社会の崩壊に招くという未来への警鐘といえるでしょう。幸いなことに、2010 年代前半の森林減少は、1990 年代の半分以下になりました。健全な森林経営の理念と認証制度が普及したからです。一方、漁業資源は再生産能力を上回る収奪が続いています。魚種別に漁獲枠を設定する試みが拡大していますが、もっと早く広く普及する必要があるでしょう。